

酢酸亜鉛錠25mg「サワイ」

1) 生物学的同等性試験

酢酸亜鉛錠25mg「サワイ」は、「含量が異なる経口固形製剤の生物学的同等性試験ガイドライン(平成24年2月29日付 薬食審査発0229第10号)」に基づき、酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」を標準製剤としたとき、溶出挙動が同等であり、生物学的に同等とみなされた。

なお、酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」(酢酸亜鉛錠25mg「サワイ」の標準製剤)と先発医薬品の薬物動態試験の結果は以下のとおりである。

酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」：生物学的同等性試験(参考)

目的

酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」について、治療学的同等性を保証するため、健康成人男性を対象とした薬物動態試験により、標準製剤との生物学的同等性を検証する。

方法

「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」(令和2年3月19日 薬生薬審発0319第1号以下、ガイドラインと記載)に準じて、2剤2期のクロスオーバー試験により、酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」とノベルジン錠50mgをそれぞれ1錠(亜鉛として50mg)健康成人男性に絶食下单回経口投与し、血清中亜鉛濃度を測定する。測定した血清中亜鉛濃度から投与前日の同時点における血清中亜鉛濃度を差し引いた値(Δ 血清中亜鉛濃度)を算出する。

採血時点	0、0.5、1、2、3、4、5、6、7、8 hr
休薬期間	3日間
測定方法	比色法
試験製剤	酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」(ロット番号:797T2S3102)
標準製剤	ノベルジン錠50mg(ロット番号:LQ01)

評価

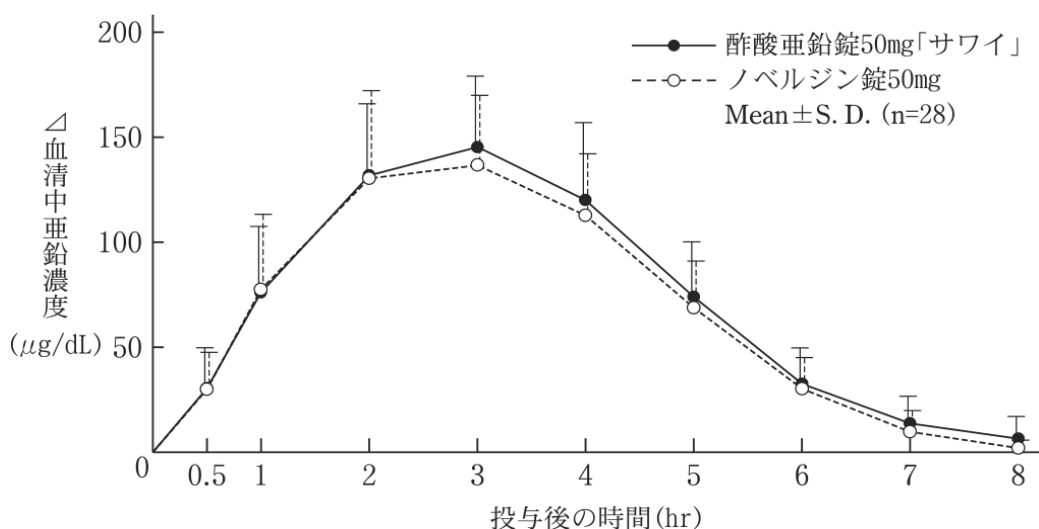
ガイドラインの判定基準に従い、両製剤の Δ AUC_tおよび Δ C_{max}の対数値の平均値の差の90%信頼区間がそれぞれ $\log(0.80) \sim \log(1.25)$ の範囲内にあるとき、両製剤は生物学的に同等であると判定する。

結果

各製剤1錠投与時の薬物動態パラメータ

	Δ C _{max} (μ g/dL)	Δ T _{max} (hr)	Δ T _{1/2} (hr)	Δ AUC _{0-8hr} (μ g·hr/dL)
酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」	155.7±29.3	2.9±0.7	0.9±0.4	592.4±121.3
ノベルジン錠50mg	150.5±31.9	2.8±0.9	0.8±0.3	562.4±107.8

(Mean±S.D., n=28)



	対数値の平均値の差	対数値の平均値の差の90%信頼区間
ΔAUC_{0-8hr}	$\log(1.05)$	$\log(1.00) \sim \log(1.10)$
ΔC_{max}	$\log(1.04)$	$\log(1.00) \sim \log(1.08)$

血清中濃度ならびに ΔAUC_t 、 ΔC_{max} 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

結論

得られた薬物動態パラメータ(ΔAUC_t 、 ΔC_{max})の対数値の平均値の差の90%信頼区間は、いずれもガイドラインの基準である $\log(0.80) \sim \log(1.25)$ の範囲内であったことから、試験製剤と標準製剤は生物学的に同等であると判定した。

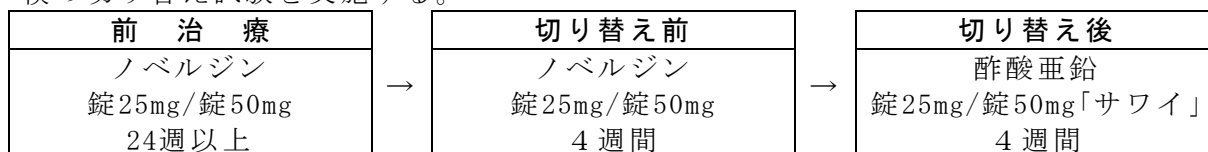
2) 臨床試験(切り替え投与、非盲検試験)

目的

ノベルジン錠25mg又はノベルジン錠50mgで治療中のウィルソン病患者において、酢酸亜鉛錠25mg「サワイ」又は酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」に切り替えた時の有効性及び安全性を検討する。

方法

ノベルジン錠25mg又はノベルジン錠50mgで治療中のウィルソン病患者における非盲検の切り替え試験を実施する。



対象 肝型、神経型又は肝神経型と診断された6歳以上の日本人ウィルソン病患者のうち、ノベルジン錠25mg又はノベルジン錠50mg(銅キレート剤又は他の亜鉛製剤を併用しない)で24週間以上継続して治療を受け、有効性が認められ安全性に問題がなく、症例登録時直近2回の肝機能検査(ALT)が安定していると医師が判断した患者
 なお13項目の除外基準を設け、1項目でも該当する患者は除外する。

用法及び用量 切り替え前のノベルジン錠25mg/錠50mgの用法及び用量と同一

被験薬 酢酸亜鉛錠25mg「サワイ」(ロット番号:797T1S3103)

酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」(ロット番号:797T2S3102)

対照薬 ノベルジン錠25mg(ロット番号:MN01)

ノベルジン錠50mg(ロット番号:LQ01)

評価

<有効性(主要評価項目)>

ノベルジン錠25mg又はノベルジン錠50mgから酢酸亜鉛錠25mg「サワイ」又は酢酸亜鉛錠50mg「サワイ」へ切り替え後の肝機能検査値(ALT)の推移について差異がないことを確認する。

<安全性>

- ・有害事象及び副作用(因果関係が否定できない有害事象)
- ・一般臨床検査(血液学的検査、血液生化学的検査、尿検査)
- ・体重、体温、血圧、脈拍

結果

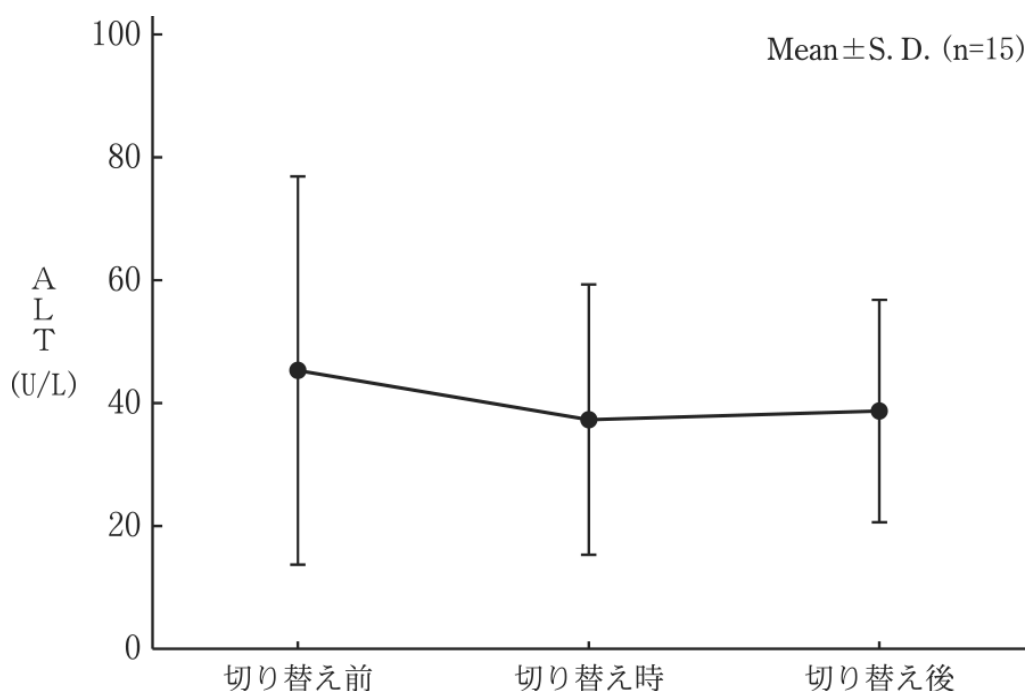
<有効性(主要評価項目)>

主要評価項目であるALTの平均値及び中央値ともに、切り替え前後の比較で特記すべき差異や変動は認められなかった。

肝機能検査値(ALT)の推移

項目	要約統計量	切り替え前	切り替え時	切り替え後
ALT (U/L)	平均値±標準偏差	45.3±31.6	37.3±22.0	38.7±18.1
	中央値 (最小値～最大値)	44.0 (10～130)	29.0 (8～82)	44.0 (9～60)
	95%信頼区間	27.81～62.86	25.16～49.51	28.72～48.74

(n=15)



<安全性>

有害事象、副作用の種類及び発現割合に関して、切り替え前後で特記すべき差異は認められなかった。

また、臨床検査値(血液学的検査、血液生化学的検査、尿検査)、体重、体温、血圧、脈拍の変動は、2例の被験者に切り替え前にアミラーゼ増加、切り替え後にリパーゼ増加がみられた以外は、いずれも生理的変動又は被験者固有の変動範囲内と判断された。

副作用の発現頻度

	切り替え前	切り替え後
解析対象例数	17例	16例
副作用発現例数(発現率)	2例(11.8%)	3例(18.8%)

副作用の発現状況

器官別大分類名 基本語名	切り替え前 発現例数(%)	切り替え後 発現例数(%)
胃腸障害 嘔吐	0 (0.0)	1 (6.3)
臨床検査 アミラーゼ増加	2 (11.8)	0 (0.0)
リパーゼ増加	0 (0.0)	2 (12.5)

結論

被験薬は対照薬からの切り替えで特記すべき差異や変動は認めず、同程度の有効性を示したと考えられた。